

変色と退色（漂白剤を使用する際の注意）

事例1 絹100%のワンピース

脇の汗ジミの処理をしようとして過炭酸ナトリウムで漂白し、フッ化水素で中和しようとしたら、より状況が悪くなった。



注意すべき点

絹素材であることから、基本的に染色堅牢度が低く色が抜け易いということを最初から意識しておく。

脱色部は汗によって染料が分解されていた可能性が高い。

本来の色が薄くなっていたり、他の色に見える場合には変退色が生じているが、脱色（退色）は染料が分解してほとんど残っていないものである。よって漂白処理（つまり引き算）を行なっても色が元に戻るものではない。

変色部は赤味を帯びた状態になっているが、これは本来の染料に使用されていたもののうち青色染料が分解したものであろう。これはフッ化水素水で中和した時点で発生したものと考えられる。

移染部は、過炭酸ナトリウムを溶かした際に使用した水やフッ化水素水の水分、スチーム等によって染料が移動したものであろう。

- ☆ 基本的に植物性繊維（綿・麻）であればアルカリ性の過炭酸ナトリウムによる漂白も良いが、動物性繊維である毛や絹には酸性の過酸化水素水を用いるべきである。また過炭酸ナトリウムの場合には強く反応させると色柄を分解する危険性は過酸化水素水より大きい場合がある。
- ☆ 過炭酸ナトリウムを使用した場合には、中和する前に十分に濯いで過炭酸ナトリウムの残留を極力減少させておくこと。残留分が多い場合には、中和に用いた酸との反応によってより強い漂白が行なわれることになり、予想以上に色素を分解したり、生地を脆化させる。
- ☆ 染色堅牢度が低いと思われなくとも、水分の使用には十分に注意する。特に洗剤などを併用した場合には浸透力や拡散力が向上するので広範囲にトラブルを生じる危険性がある。
- ☆ 過炭酸ナトリウムは高温状態では急激に反応するので、スチームなどの熱管理に気をつける。

- * 漂白剤はその使用濃度や温度によって効果が異なるし、酸やアルカリによる中和時の反応も急激なものとなることを理解しておこう。
- * お茶のシミや軽度な汗ジミであれば、35%過酸化水素水を20倍希釈したものに若干のアルカリを混ぜたものを塗布するだけでも効果がある。浸漬の場合でも40～45℃のお湯に洗剤を適量、35%過酸化水素水を5%（お湯20リットルに対し1リットル）以下の使用で10分以内の放置（染色状況やシミの状況で異なる）でかなり効果がある。
- * 汗ジミの場合には、地色に汗の発色による黄色が被さり、元色がくすむこともある。このような場合には色素の分解が好ましいが、黄色は他の色と比較して分解しにくく、地色が先に分解する場合もある。
- * 漂白剤や汗、紫外線（太陽光線や蛍光灯）で分解しやすい色は青色が一番であり、濃色には青や赤が用いられていることから、青色が分解されて赤味を帯びたようになっている場合がある。このような場合には漂白しても元には戻らずより悪い状態になってしまう場合がある。